

75. 梅ノ木石棺仏

1

現在県下に確認されている石棺は、その数35基といわれているが、更に最近(1977)竜王町においても花崗岩製の石棺蓋の出土を見たのである(棺身は今のところ発見されていない)。

但し、此度の出土品については、単に石棺としてのみの単数でなく、仏像の彫刻(勿論造像は後世のもの)された石棺仏としての複数の形で出土したものである。従ってこの際、石棺そのものについて、調査究明されるべきは当然のことながら、石棺仏となっている点についても、注意すべきところがあるように思われる。然しこの点については今後の研究をまたねばならない。

なおこの石棺の名称を、出土地の地名、梅ノ木を冠して、梅ノ木石棺仏と仮称させてもらっておく。読者よろしく諒とされたい。

幸い今回本誌の貴重なる紙面を、拝借する機会を与えられたので、此处では丸山氏と私の調査や所見を2~3の事柄について、共載という形で、広く読者諸賢に、御紹介申しあげたい。

さて、巻頭の図は、竜王町大字川守に所属する小字梅ノ木と呼ばれる所を中心とした図であるが、図の如く、この梅ノ木は、東方に接する雪野山々系と、西方に隣する日野川との間にある狭隘の地で、1977年から1978年にわたって、圃場整備が行われたが、その整備作業中に、図のA点からこの石棺仏が掘り起こされたのである。

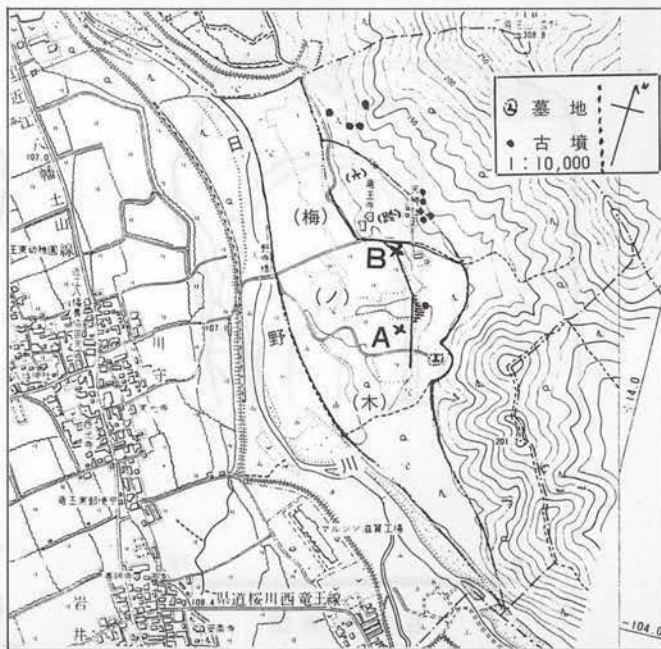
このA点は、その東南約60mの山手には墓地があり、又東方約50mの山裾には古墳跡がある。更に北方約300mには古刹竜王寺があり、その直ぐ表には通称奈良路と呼ばれる古道が、東西に通じ、又東側には幾基かの古墳が散在している。

このような環境下にあるA点には、柚人や墓参する人達の往来する小径が通じ(整備以前)傍の叢の中に、かなり大きいと思われる1個の石塊が、先端僅かばかりを地表に露出し、大部分は地中に埋まっていた。

この石塊については、ここを通る人達は、別段気にとめることもなく、単なる石塊と思ひこみ、ためらうこともなく、露出する石の上に腰をおろし、煙草を吸いながら、仕業の疲れを癒していたことが、しばしばあったという。

然しこのA点の石塊は、たまたま整備区域内にあった関係上、当然取り除かれるべきものであった。1977年9月末日、この石塊の掘り起こし作業が無造作に行われていたが、この時意外な事実を目撃したのであった。それはこの石塊の側面に地藏菩薩が刻まれていたことで、今の今まで邪魔な石とのみ思ひこみ、荒けない扱いをしていたものが、たちまち驚き且つおののき、態度は一瞬にして改まり、早々他所に仮安置され、お花が供えられた。斯くて日時はすぎ整備終了をまって、図のB点に再安置されて今日に及んでいる。

こうした掘り起こし作業が行われて間もない10月8日、この次第を聞き現場に赴き、早速拝見に及んだ所、石仏はひどく風化しているが、花崗岩製のものであった。その形状は、普通一般に見られるものとは些か趣を異にし、特別な形状に仕上げられた稍長方形の板石



梅ノ木石棺仏出土位置図 A 出土地 B 安置場所

で、一見して石棺の蓋であることが感じとられた。これの詳細なことについては、後程説明されるが、ただこの場合棺身は見当らなかつた。かつてはこの蓋を具えた石棺があったと思われることは、この附近に数多くの古墳があることによって、頷かれる所である。

仏像はこうした石棺蓋外面中央左寄りに楕円形の彫込みを作り、その中に半肉彫りに造像されているが、永年にわたる風化のため、お顔は模範として、耳目を弁別することは出来ない。ただ錫杖を持つ主像姿の地藏菩薩であることは、臆げながらも感じとられる。(※)

2

梅ノ木の石棺仏と称されるこの地藏は、残存部70cm(縦)×80cm(横)×23cm(厚さ)を測る花崗岩製石棺の蓋の外面に彫刻されており、その表面は長年にわたる風化のためかなりいたんでいて、わずかに像の輪郭をとどめるに過ぎない。また石棺蓋自体の大きさは、上下と一方の側辺を欠いているため不明である。

像は石棺の長辺に沿って彫込まれ、凹面中央より向かって左にやや片寄っているように見うけられる。その背後には籠とも後背とも受けとれる半楕円の枠どりがなされている。またこれは立像と推測され、右肩上方より左下方へ錫杖を持っているものと思われる。

このような花崗岩を棺材とする石棺の出土例は全国においても極めてまれで、ましてや花崗岩を素材とする石棺仏となると、播磨のように全国でも有数の石棺仏出土地にさえその報告例を見ない。しかし近江においては、6世紀後葉期にすでに凝灰岩から花崗岩へと

いう石棺材質における注目すべき変化が認められ(注)、近江国の大半を花崗岩製の石棺が占めている。従ってこれを素材とした石棺仏が現れた事は極めて自然に受けとめられるものと思われる。

ちなみに、この梅ノ木の石棺仏の他に例を掲げるならば、大津市坂本町所在聖衆来迎寺にあるアミダ三尊来迎石棺仏が知られている。この石棺仏は1.45m(縦)×1.1m(横)×0.15m(厚さ)の石棺蓋を横位にし、そこに三体のアミダ仏が彫刻してあり、むろん花崗岩を棺材とする石棺である。

(注) 『立命館文學』第312号「近江石部の基礎的研究—近江・大和の石棺とその石工集団—」丸山竜平

(※※)

3

出土須恵器

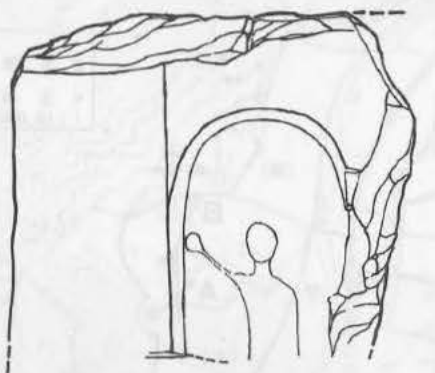
石棺蓋の掘り起こされた地点より東北およそ15mのところにある、山麓裾部の隆起した崩壊個所より出土した須恵器片である(小森メモ)。採集者である小森太郎氏(第1節執筆者)はこのすでに削り取られた崩壊場所が元来古墳であったように思われるとされる。

採集された土器片はすべて須恵器で9点である。

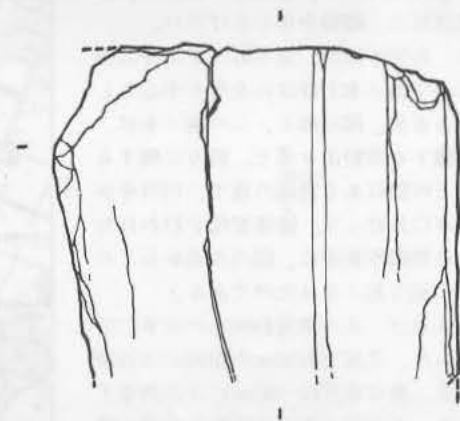
そのうち、古墳時代わけても石棺の年代に該当する6世紀後半のものは坏身として3点が知られる。

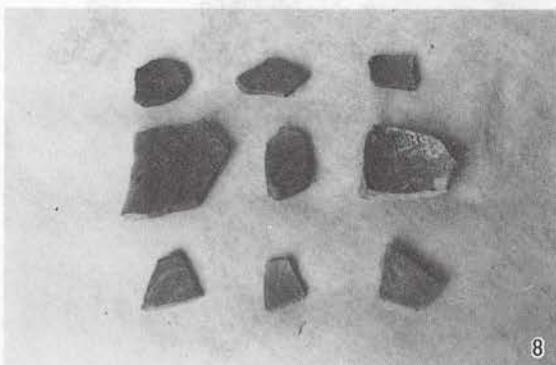
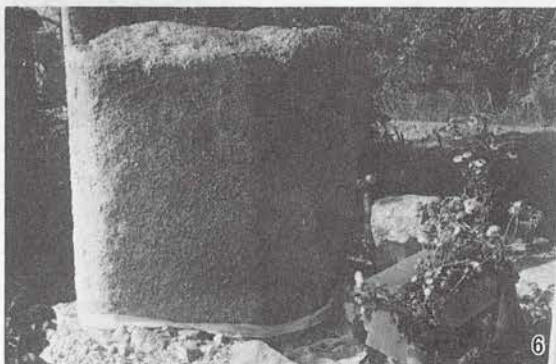
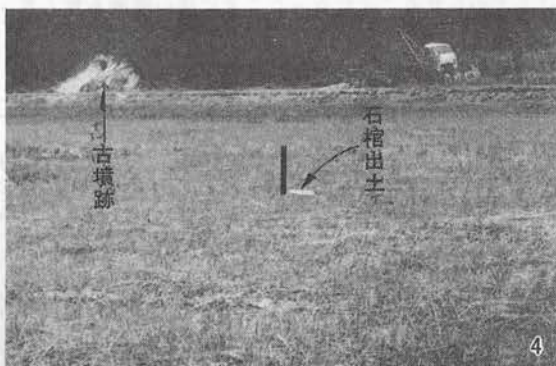
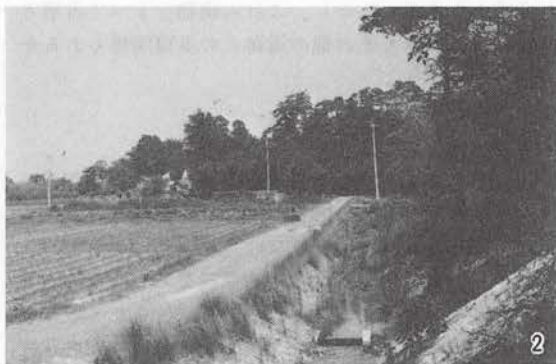
また、奈良時代の坏身・坏蓋片各1点、古墳時代以降の甕・壺腹部破片4点である。

最近の古墳の調査では、追葬、あるいは再利用・転用のためか古墳時代以降の遺物が古墳の中から発見さ



石棺実測図





1. 竜王寺、雪野寺廃寺跡と雪野山(南から) 2. 竜王寺とほ場整備のすんだ農道(この農道のつきあたり左手に石棺)
 3. 古墳跡? 4. 古墳跡?と石棺出土地点(西から) 5. 石棺蓋上面と刻まれた地藏尊 6. 石棺蓋斜側面
 7. 石棺蓋裏斜側面 8. 出土須恵器

れることもある。しかし、これら遺物をすべて古墳と関係付けるよりもその他の遺跡との重複関係もあるかも知れない。

4

むすびにかえて

近江でも最も著名な雪野寺廃寺跡の西側と南側の二方が圃場整備で大きく開発されたが、それにとまなう遺跡の調査は取り組めていない。

しかし、この変貌する古代的景観をあらゆる物的証拠で保存し、記録することに情熱を燃やされている小森太三郎氏によって、貴重な遺物がこの世の人の記憶にとどめられることになったことに深い感激を覚えざるを得ない。

雪野寺廃寺跡の北、東側には県下でも屈指の大規模

な横穴式石室が開口している。当然この地域を治めた首長の墓に相違ない。このような首長墓の場合、必ずといってよい程、県下でも数少ない石棺葬法がみられる。

石棺に葬られた人物はどこにでもいたわけではないのである。国造クラスを筆頭に村首クラスまでである。しかし、この石棺作りの工人もまたその職掌を示すかのように石棺に葬られた例があると考えている。

いずれにせよ、開発が終わり、出土位置の状況も不明なまま、この貴重な石棺が二次的な資料に終わったことを石棺被葬者にわびつつ、石棺が末永くこの「奈良路」の路傍に保存されることを念じて筆をおく。

(※※※)

(※ 小森太三郎 ※※ 石橋正嗣 ※※※ 丸山竜平)

